

まえがき

本書の書名を「節用集史研究の射程」とする。節用集の史的展開を追究するにあたって、豊かな記述を行なうために必要な、いわば「視力」と「視野」を示そうとの意図がある。これまで手が届かなかった部分にいかにか手を伸ばすか、これまで知られなかった辞書史上の事象をいかに的確に位置づけていくかといった、新たな手法の手がかりを求めている。試行錯誤を提示するものである。

ただ、そう構想しはするものの、筆者の力量はとも十分なものとはいえない。が、ここまでは検討できる、このようなことは言いうる、さらにはこのようなことも問題として取り込めば、より豊かで確実な記述研究ができる見込みがあるなど、そうした可能性を示すことは十分に価値のあることだと考えている。

従来手法からすれば、書誌的整理と本文系統の闡明を基盤とすることで、他の各種研究も確実に豊かな実りを得ることになる。一方では、基盤的な研究の整備だけが節用集史研究の本務だと思われかねず、見過ごされる観点や将来的な見通しが得られなくなるおそれもあるように思われるのである。

また、一本の節用集が、出版者によって提供され、利用者によって活用され、さらにその影響も見られるようになる現実面は、実は、基盤的研究からの情報とは無関係に進行することもありそうではある。辞書利用者は、基盤的な研究を心得たうえで辞書を利用したり購入したりするものとは限らず、書店で眺めた印象や世の評判などに依存して購入するのが通常のありようなのではなからうか。それは、現代でも近世でもあまり変わらないことであろう。

そこで、基盤的研究はさておいても、抑えられるだけの事象について検討を進めることが許されるものと考えたい。

もちろん、基盤的研究を利用できるなら活用すればよいし、逆に、諸事象の検討が基盤的研究に新たな視点を提供することも考えられないではない。そうしたアプローチ間での視点や情報のやりとりを期待する意味でも、基盤的研究の枠に囚われない検討がなされる必要があるものと考えたい。その、ささやかな見本となればと企図したのが本書ということになる。

第一部は、まず、本書を通読するための基礎的な前提と情報を示すこととした。基礎的な部分であるため、読む人によつては既知の情報も少なくないであろうが、言語生活研究や、その基盤となる近世社会の特質に触れる部分もあるので、一読されればと思う。

また、言語生活というコトの関わる各種側面についても記してみた。言語社会のなかに節用集を定置するための研究の必要性は以前より叫ばれていたが、その手法をどうするか、どのような切口がありうるのか、そしてそのような検討が提出された場合、いかに評価するかが判然とは問われてこなかった。ここでは、筆者が想定する手法と切口について紹介してみた。

第二部には、言語生活史研究のための準備的論考を配した。書誌的整理と本文系統の説明を節用集史の記述的研究の骨格とすれば、それを肉付け、縁取る部分もあるはずで、それらにも目配りすることで節用集史の記述的研究の豊かな実りを迎えるものと考ええる。ここでは、その役割を果たすことを目的とした諸事例を収集・例示することとなった。近世の言語生活はどこまで節用集の影響を受けるのか、近世節用集はどのように言語生活の場にあったのか、近世節用集の諸類型と人々の位相差とはどのように組み合わせられるものなのかといった、人々の生活と節用集とのあいだで考えられる問題を検討してみたものである。

第三部は、言語生活史的研究同様に遅れている、付録類へのアプローチについて記すこととした。節用集、ことに近世節用集の付録をどのようなものと捉えるかを、当時の社会とも関わらせながら示すこととした。また、すでに、辞書史研究の立場からも付録にアプローチした例があることを示すこととし、付録研究の動向や意義を知らせるよう努めた。

第四部は、近現代社会における、一般的な節用集の受けとめられ方を記すこととした。合わせて、辞書を取りまく日本語の諸事象についても瞥見することとした。「近世節用集の近代」とでもいえるべき課題を設定し、これを説明することによって節用集史の記述的研究をまっとうすると考えた、その試行錯誤として受け取ってくだされと思う。

第五部は、第四部同様に近現代を対象としたが、より強く深く近世節用集と関わった例を選び、それぞれにおける「節用集とは何か」を見ることとした。辞書史学・国語史学の専門家の場ではなく、より一般に近い人々の節用集観をすくうことを目指している。後半では、他の研究分野における利用例を中心とし、その方面での問題・課題を指摘するかわら、それらの成果を辞書史学・国語史学研究にいかにかけるかを考えている。第四部同様、この種の検討のありかたについて、筆者自身、ビジョンを確立できていないが、「近世節用集の近代」を説明するためのもう一つの試行錯誤として受け取っていただければと思う。

第六部では、付録として、久保田善次良写『早引節用集』（架蔵）の影印と、上小剣『紫合村』本文を提供することとした。善次良写本は、善次良一五歳のおりになされたもので、その年齢上、寺子屋の卒業記念として書写されたものと思われる。小説『紫合村』の主要登場人物には「節用集」と綽名されるものがおり、その挙措に作者・上小剣の寓意が込められているものと期待される。それぞれ第二章第四章・第三章第四章にて言及してはいるが、ここに披露して多くの方の目に触れてもらい、意見を頂戴したいと願うものである。

以上のような構成により、本書は、目が届く限り、手が届く限りに範囲を広くとった論考の集積となった。ここまでのことはできはする、その限界というか見本として提示するものであり、辞書史研究のささやかながらも一石になればと願っている。

なお、近代資料の多くと近世資料の一部については、国立国会図書館デジタルコレクションに依っている。「特定少数の人々の使用例を分析し、それを多数蓄積・総合することで、少しでも不特定多数の使用様態に近づけないか」（佐藤二〇〇三b）との夢想も、一定程度、実現できたように思う。また、予想外の節用集利用例にも接することができた。至便の環境整備に尽力された各位に謝意を表したい。

目次

まえがき	i
------	---

第一部 序論

導論	2
----	---

第一章 近世節用集の展開	3
--------------	---

第一節 近世の辞書	3
-----------	---

第二節 近世節用集の展開	7
--------------	---

第二章 節用集を定置する場と方法	17
------------------	----

第一節 辞書と言語生活	17
-------------	----

第二節 近世節用集へのアプローチ	19
------------------	----

第三節 近世社会と言語実態	22
---------------	----

第三章 近世節用集の諸相一端	25
----------------	----

第一節 近世初期節用集の消長	25
----------------	----

第二節 文学作品題目にみる近世節用集	31
--------------------	----

第三節 書き入れによる検討	37
---------------	----

第二部 言語生活史研究へ

導論	44
----	----

第一章 農民と節用集	49
------------	----

はじめに	49
------	----

第一節 美濃国大野郡高屋村(岐阜県本巣市)	50
-----------------------	----

古田家	50
-----	----

第二節 上野国勢多郡原之郷村(群馬県前橋市)	52
------------------------	----

市・船津伝次平	52
---------	----

第三節 出羽国村山郡谷地新町村(山形県河北町)	54
-------------------------	----

・榎藤左衛門	54
--------	----

第四節 能登国羽咋郡町居村(石川県志賀町)	55
-----------------------	----

・村松標左衛門	55
---------	----

第五節 山城国天田郡榎原村(京都府福知山	
----------------------	--

第四節 メディア性の再認識	40
---------------	----

市）・易蔵	56
第六節 武蔵国埼玉郡八条領西袋村（埼玉県八潮市）・小澤豊功	58
第七節 備後国福山藩領山手村（広島県福山市）・三谷庄右衛門	60
おわりに	63
第二章 海民と節用集	65
はじめに	65
第一節 佐渡国宿根木村・柴田（新発田）収蔵	66
第二節 奥州名取郡廻船大乘丸船頭・清蔵	69
第三節 菱垣廻船天徳丸船子・善蔵	72
第四節 紀伊国廻船天寿丸・虎吉ら	73
おわりに	74
第三章 子どもと節用集	77
はじめに	77
第一節 就学前後の節用集	78
第二節 就学児の識字傾向から	81
第三節 家庭環境と子どもの節用集	84

第四節 境界年齢者の節用集	87
第五節 子どもの節用集への視点	89
おわりに	91
第四章 学習具としての節用集	95
はじめに	95
第一節 一般論として	96
第二節 学習の具体例	98
第三節 寺子屋師匠の写本節用集	101
第四節 一五歳・久保田善次良の写本	103
第五節 節用集を抜粋・再編する	107
おわりに	109
第五章 価格の推移	113
はじめに	113
第一節 延宝期	114
第二節 元禄期	117
第三節 明和期・寛政期	119
第四節 化政期・天保期	122
おわりに	125

第三部 付録研究へ

導論

第一章 付録の検討のために

はじめに

第一節 付録研究の必要性

第二節 近世節用集の付録の性格

第三節 付録の多角的研究のために

第四節 付録へのアプローチ

第五節 地図史学の付録世界図把握

おわりに

第二章 付録記事の社会性

——本願寺との関わり——

はじめに

第一節 付録記事への西本願寺の介入

第二節 大型本節用集の位置

第三節 『都会節用百家通』一件事後の諸相

第四節 (付論)『大日本』永代節用無尽蔵』の

異文

おわりに

第三章 付録記事の信憑性

——農夫・万平、二四三歳——

はじめに

第一節 『大日本永代節用無尽蔵』を採り上

げる契機

第二節 天保一五年にあったこと

第三節 万平の生年・没年

第四節 誤認記事の生成経緯

おわりに

第四章 日本図付録と地理史学

はじめに

第一節 付録の研究のために

第二節 地図史学での捉え方

第三節 日本図を例に

おわりに

第五章 日本図研究と『節用集大系』

はじめに

第一節 近世節用集所掲日本図の傾向

第二節 例外的な所掲日本図

第三節 版種と蝦夷図	211
第四節 『節用集大系』の陥穽	218
おわりに	223
第六章 書評 柏原司郎著『近世の国語辞典 節用集の付録』	225
はじめに	225
第一節 「第一部 研究篇」	226
第二節 「第二部 資料篇」	230
第三節 本書の学術的価値	232
おわりに	233
第四部 終焉期点描	
導論	236
第一章 明治期	237
はじめに	237
第一節 近世節用集への思慕・回顧	237
第二節 注意される刊行例	242
第三節 早引節用集の残影	245
第四節 辞書における五十音順導入の諸相	246

おわりに	250
第二章 大正期	253
はじめに	253
第一節 市島春城「節用集の功德」の俗書観	253
第二節 中野重治『梨の花』にみる辞書と家庭	256
第三節 武田桜桃編『坐右新辞典』の近世性	259
第四節 イロハ順と五十音順	262
おわりに	269
第三章 昭和期	273
はじめに	273
第一節 節用集の終焉	273
第二節 イロハと五十音の交錯	277
第三節 福本和夫『私の辞書論』	281
第四節 複製への回路	285
おわりに	290
第四章 昭和期・二	295
はじめに	295
第一節 尾崎行雄の見識	295

第二節 戦前・戦中期の例	300	第二節 時代設定の確認	341
—— 既知の存在として		第三節 作者の意図をくむ	344
第三節 戦後の例—— 既知の節用集	305	おわりに	347
第四節 戦後の例—— 発見の諸相	308	第三章 昭和戦前期小説	
おわりに	313	—— 岡本かの子『落城後の女』——	351
第五部 近現代節用集認識史		はじめに	351
導論	316	第一節 関係本文	351
第一章 明治期	317	第二節 「饅頭屋本の節用集」	355
はじめに	317	第三節 かの子が参照したソース候補	359
第一節 「節用集」の名義	317	第四節 おあんの節用集のモデル	364
第二節 教養書とみる例	319	おわりに	369
第三節 物知りを節用集と称する例	322	第四章 昭和戦後期隣接研究分野	
第四節 石井研堂『鯨幾太郎』	326	はじめに	373
おわりに	332	第一節 付録利用—— 教育資料史	374
第二章 大正期小説		第二節 本文利用—— 演劇史	379
—— 上司小剣『紫合村』——	337	第三節 本文利用—— 食文化史	384
はじめに	337	おわりに	392
第一節 登場人物・和三郎の節用集性	338	第五章 現代隣接分野	
		はじめに	395

第一節	節用集認識の諸相	395
第二節	国文学研究	401
第三節	文化史研究	405
おわりに		410

第六部 付録

解説	414
〔その一〕 『早引節用集』 久保田善次良写本	415
〔その二〕 上 <small>司</small> 小剣作「紫台村」	469
あとがき	493
参考文献	499
索引	521